

「神の摂理」

～すべてが益となる神の正義～

ローマ 8:31 ~ 39

創世記の時代、神様は天地万物を創造されましたが、それらが自らのために生きるように創造されませんでした。被造物は、すべてが自分の役割を果たしていました。

神の摂理について先週学びました。

「摂理」(providence)「摂理」なす5つの動詞について(29~30節)

- ①あらかじめ知っている (前もって知っている)
- ②あらかじめ定める
- ③召す
- ④義と認める (義認)
- ⑤栄光を与える (栄化)

これらはすべて過去形であり神様は創生の時代にあらかじめこれらを決めておられました。

「正義」とは旧約聖書の中で2つのイメージで出てきます。一つは「悪を行わない」悪の反対語としての意味であり、もう一つは「共同体に対する忠誠」の意味で出てきます。ローマ書の1章から6章では人間の罪について語られています。ローマ書8章27~29節は1章から6章までの結論を言っています。8章31節から39節では1章から6章のまとめと9章以降の準備をしている箇所です。

1. 31節「では、これらのことからどう言えるでしょう。」

「では」と言うことばはローマ書の1章から8章までの全体を指している、私たちがすべてを信仰によって神様から与えられていると言うことを意味しています。人は不義に生きるようになったため、神様が本来創造された目的から離れてしまいました。聖書は「不義」に生きる人に対して「正義」で生きるように伝えています。しかし人は「正義」と聞くと自分が裁判官になって自分の「正義」によってほかの人を裁くようになり、正義で人を変えようとしてしまいます。神様が創ったエデンの園で、人は共同体の一員として自らの役割を果たす事を目的に創られました。人が神様の創られた姿に戻ろうとする方法は、神の計画に生きる人々(人間の側から)、神を愛そうとする人々(神の側から)の二つです。神様の側に立って神様を愛そうとする人々には、恵によって神様が元の姿に変えていくとくださると言うのが先週読んだ場所です。

2. ローマ書8章の祝福

(1) 最初に創られたアダムの祝福。私たちは神の養子です。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼ぶことができます。

(2) 私たちは、キリストとの共同相続人とされた。イエス様が長子であり、私たちは兄弟です。つまり私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。私たちはキリストによって神の子とされました。そのため神の相続人となりました。私たちはすでにすべてを持っています。持っている事を知らないだけです。この朝、私たちが「持っている」と言うことを知らなければいけません。しかし、従えない最大の理由は

①諦めさせる。創造者でもないのに、創造者ようになってしまいました。無理だと自分の限界を決めてしまいました。

②納得させようとする。人は納得しないと従えないようになってしまいました。礼拝ですら、安息日を尊び愛し合うことにも納得が必要になりました。しかし、限界を決めるのも納得も神様の領域です。神に成り代わってはいけません。

③高ぶり。全ては神の恵みであって、何一つ私たちの力ではないのです。正義とは、自らの共同体の中で役割を果たすことです。聖書では、私たちが体の各器官として例えられています。自分の体は、文句を言うだろうか？イヤ言いません。自分の体の各器官は比較も文句も言わないのです。人間は違います。一つということを知らないからです。天地万物は一つであることを知らなければなりません。自らのあり方を変えないとこのことは理解できません。理解できないと元の姿には戻れません。だからこそ、神様の元に帰りましょう。

(3) 救いの保証として御霊を受けた。私たちに聖霊様が共にいてくださいます。初生りがあれば実が残ります。御霊を受けた私達は実が残ることを約束されています。

(4) 聖霊の執りなしがある。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください」

(5) 罪の赦しと栄化の保証が与えられている。私たちはすでに与えられているのだから、賛美しながら生きていけます。

3. 真理は私たちに自由にし、私たちに賛美する民に変える。

「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」

31 ~ 32節

(1) 特に、試練に会ったときに発する疑問である。(2) 神は私たちの側についておられる。人は神の姿に戻ろうとする時に試練の中を通ることがあります。しかし、神は常に共におられます。このことから、私たちに敵対できる人はいないことがわかります。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ」
神は与える方です。必要なものをお与えになるので、不必要なものが取られるのです。

33節

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか」サタンは神様に告発するために様々なもので人を惑わします。しかし、私たちはイエス・キリストの兄弟とされました。神がそのようにされました。だから私たちに訴えるものはいないのです。そのことを知らなければいけません。私たちに敵はいません。「神が義と認めてくださるのです。」神が選び神が義と認めてくださいます。(33節は、ローマ1~5章の義認のまとめ①神は、いわば最高裁である。それ以上の裁判はない。)

34節

「罪に定めようとするのはだれですか」(1) それは神か、キリストですかという言葉が隠されています。イエス様自身も私たちに罪に定めることはありません。神の前にイエス様は弁護者となって共に立ってくださいます。そして、十字架によって裁きは終わっていることを告げてくださいます。私たちが罪に定められることはありません。「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」

35 ~ 36節

「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちが、ほふられた羊とみなされた。』と書いてあるとおりです」「だれか」と書かれているのは「苦難」に置き換えることが出来ます。必ずしも人ではない。苦難は人が神の元に帰る時に必要なものであって益となるものです。苦難を免れるという約束ではありません。「しかし、私たちが、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです」このことを知っておかなければなりません。勝利すると言うことは敵がいると言うことです。的とは罪に気づいていない自分の事です。罪に気づかないでいる事で、その罪が偶像礼拝になっていきます。この敵の存在を理解していることが大切です。そして見張るのです。

38 ~ 39節

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」
私たちが神の愛から引き離すものは、被造物世界に存在しません。

まとめ

神様のなさることは「摂理」。すべて神様が動いていかれると言うことです。その中で私たちに出来るのは、いかに正義を自分に向けるかと言うことです。私たちが本来の役割を知っている事が必要です。私たちはそれぞれ共同体の一部です。この共同体の中で自らの役割に「忠誠」を尽くすことが「正義」です。私たちに求められるのは、神様の前にて、神様を信じ、諦めないことです。神から引き離そうとするのは自分です。劣等感や諦め、神の前に自分が納得したいという思いがあると、神様の恵みから引き離されていきます。私たちがどんなことがあっても神様のそばに居ることを願わなければいけません。神と人との愛によって成し遂げられる!! その恵みを取り去るものはない。これがローマ書8章で語られている事です。神の恵みの中にどまりましょう。神は尊う神ではなく与える神です。神は与えるために、不純物をとられます。神のワザは与え続けて完成しています。相続人である私達は、全てを相続しました。そして受けているのは赦す権威です。正義とは赦すこと。私達は赦す権限を持っています。あなたの罪は赦されたというイエスキリストがなされた御業。その一歩的な恵みによって私たちは赦されましたからこそ、赦せない人をイエスの御名によって赦す事ができるのです。それを信じ、奥底からこみ上げてくる怒りや憎しみを赦せると信じて赦す宣言をして行きましょう! 今日から信じないものではなく信じるものとして弱弱しく生きるのをやめて、神の計画によって役割を果たして行きましょう! ズレたのであれば、戻ればよい!! ただそれだけなのです。神様が与えてくださった恵みに生きましょう!

(要約者:日名 洋)

(2019年8月18日)